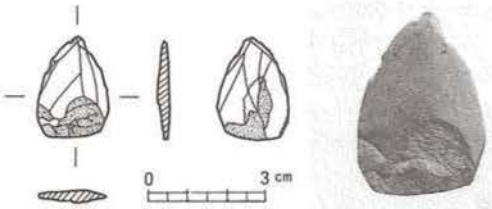
滋賀文化財だより
NO. 68
1982. 11. 30
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

105. 日野町内池遺跡出土の磨製石鏃について

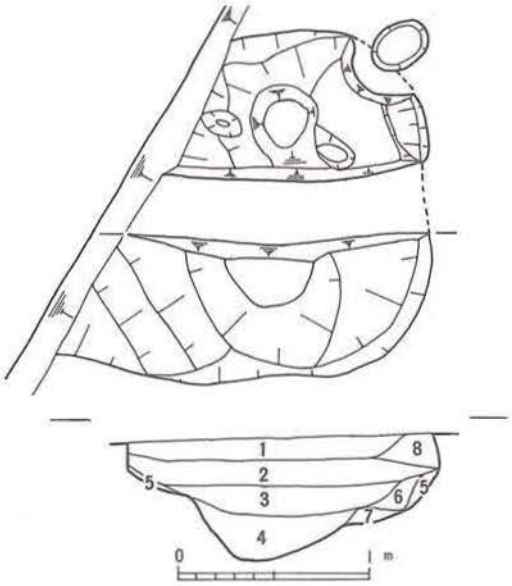
内池遺跡は、蒲生郡日野町内池に在る。この磨製石鏃発見の契機となった調査は県営ほ場整備事業に先立って、昭和56年度に実施され、弥生時代の土壙をはじめ、飛鳥時代の竪穴住居、奈良時代末期の溝、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物・溝等が検出された。このことから、内池遺跡は弥生時代から鎌倉時代にわたる複合遺跡と確認された。その詳細は後報に譲り、今回は弥生時代の土壙より出土した磨製石鏃について紹介したい。



この磨製石鏃は、一部欠損するが、ほぼ原形に近く、無茎で基部は平基式である。長さ2.6cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.4gを測る。最大幅は下位にあり、全体に丸味をおびている。その形態は、長浜市鴨田遺跡出土[註1]4例のうちの1例に類似するが、本例は中央に明瞭な鎬がなく、むしろ、扁平な感じを与える。両面ともにその凹部に自然面を残し、また、先端部、側辺の数か所には、使用痕とみられるリング状の欠損部がある。材質は、粘板岩系石材である。

また、この石鏃が出土した遺構は、1.9m×1.9m以上の方形気味の平面形を持ち、深さ 0.6mを測る土壙である。堆積土層のうち、1～3層に炭化物が含まれており、遺物もここに集中し、この石鏃は第3層より出土した。その時期については、現在、伴出遺物等について整理中だが、弥生時代中期かと推測される。また、この土壙の性格は、同時期の遺構をともなわないため不明であるが、昭和57年度実施中の発掘調査でその性格が明らかとなろう。

以上、今回出土した磨製石鏃によって、内池遺跡は弥生時代中期に遡り得る可能性が生じ、古墳時代以降の遺跡が数多く存在する遺跡周辺の発展基盤の一端を



1．黒褐色泥質土　2．黒褐色粘質土
3．黒灰色粘質土　4．淡茶褐色粘質土
5．淡灰黄色粘質土（やや黒味）
6．3＋地山ブロック
7．灰褐色粘質土＋地山ブロック
8．2＋地山ブロック

うかがわせることともなった。県下における磨製石鏃出土例は、鴨田遺跡、[註2]湖西線関係遺跡、[註3]美園遺跡、[註4]高峯遺跡、[註5]服部遺跡[註6]等で、県北・東部には無茎の、南・西部には有茎の磨製石鏃が分布する傾向が指摘[註7]され、本例は、これを肯定する資料となった。しかし、美園遺跡出土のものは無茎であることなど、まだ不明な点も多い。磨製石鏃という特徴的遺物の今後の研究成果を期待したい。　（山本一博）

註1・2　中谷雅治他『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書II』（滋賀県教育委員会　昭和48年）
3・7　田辺昭三他『湖西線関係遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会　昭和48年）
4　林博通『美園遺跡発掘調査報告』（滋賀県教育委員会　昭和50年）
5　丸山竜平『湖西道路関係遺跡調査概要』（滋賀県教育委員会　昭和51年）
6　大橋信弥他『服部遺跡発掘調査概報』（滋賀県教育委員会　守山市教育委員会　昭和54年）

106. 湖東における高地性集落の調査

図1　遺跡の位置

1．堤ヶ谷遺跡　　2．雨宮古墳

1

堤ヶ谷遺跡は、蒲生平野の南西隅を画する丘陵地に占地している。地籍は蒲生郡竜王町岡屋・堤ヶ谷に所在する。遺跡は東西に伸びる尾根上に形成され、稜線付近を走る等高線は標高 150m を示している。平野部との比高はおよそ35mを測り、稜線上からは蒲生平野の眺望に恵まれた立地条件を備えている。丘陵地下端には、日野川水系の支流の祖父川が北流する。蒲生平野は、眼下の岡屋の集落辺りから東西より丘陵が迫って、祖父川が形成する谷へと連なり南方では狭隘となってゆく。この谷は水口方面へ通じており、古くから開けたルートと思われる。

調査対象地の大半は既に土取り工事によって著しく削平されていた。既に紹介された磨製石剣等の弥生中期の遺物群は、谷内に形成された遺物包含層中より一括して出土した。谷内の遺物群の様相は、一定のまとまりをもっており、こうしたあり方はその尾根上部に竪穴住居等の存在を示唆するものと推察された。

2

前述の谷内より比較的多くの石器群が出土している。その内容は、石鏃・石槍・有柄式磨製石剣・磨製石斧・石錐・砥石・叩石・作業台に用いたもの等多岐にわたっている。これらの内、石鏃・石槍・石錐はサヌカイト製で、石剣・石斧は粘板岩製である。こうした石材は、近隣地域では採取されず興味深い。サヌカイトは、多くの剥片が採集されており、原石を搬入して遺跡内で製作したものと考えられる。

次に最も普遍的に出土した打製石鏃について、佐原真氏の形式分類(註1)に準じてその内容をみてみよう。出土した石鏃の組成は、凹基無茎式(1)・平基無茎式(11)・円基無茎式(3)・凸基無茎式(3)・凸基有茎式(4)である(括弧内の数字は出土個数)。凹・平・円基式と凸基式の比率は15：7で、凸基式群のしめる割合が小さい。畿内の弥生中期では、凸基式群の石鏃は9割をしめる代表的な形式といわれ、その様相を異にしている。一方、西日本の打製石鏃のうち、凹・平基式群は長さ3cm未満、重さ2g未満のものが、また凸基式群は長さ3cm以上、重さ2g以上のものが大多数を占めるとされる。こうした傾向は、およそ一致し凸基式群(図2－7・8)は断面が厚く、重いもの(同図8)では 7.3g を計測した。

最後に製作技術の上で総体的にみた場合、平基・円基式群は大剥離面が両面の鏃身中央の平坦面として残る場合が目立ったことを指摘しておこう。

以上データー不足に起因して問題点も多く、今後当地方の石鏃の変遷や割合、さらに地域色が具体化されることを期待したい。

3

出土した弥生土器の器種は、壺・甕の貯蔵形態と煮沸形態が大多数を占めた。以下、各遺物の観察を行なってみよう。

壺B類（図3－1～3）　体部以下については明らかでないが、最大径の大きな算盤形を呈するものと思われる。口縁部は幅広で、文様帯となっており、その下端に刻み目を施すもの(1・2)と施さないもの(3)がある。また、端部を拡張して波状口縁風に仕上げるもの(2)がある。文様帯には、列点文が主流でその内容はバラエティーに富んでいる。頸部の最もくびれたあたりに、櫛描直線文や列点文を施すことが一般的であると思われる(1・3)。また、施文の前段階のタテハケを残すことは、A類と大きく異なる点である。

壺A類（図3－4・5）　伊勢湾沿岸部の貝田町式の細頸壺の模倣品である。伊勢湾沿岸部のものに比し頸部が太いことが最も異なる点として指摘できる。しかし頸部にみる複帯構成の櫛描直線文(5)は、なお伊勢湾沿岸部との類似性を強くとどめている。こうした櫛描直線文には何回かの描き継ぎが認められる。

壺C類（図3－6）　おそらく丈高の体部を有するものとみてよいだろう。頸部は真直ぐ伸び、大きく曲

折して内湾気味の口縁部へ続く。その下端には刻み目文を施し、櫛描列点文を羽状に飾る。頸部にも列点文で複雑に飾る。なお施文前段階のタテハケを残す点は、壺B類に共通する。形態および文様手法等から在地色の強い器種と考えられるが、その量は多くはない。

壺E類（図3－12）　外びらきの頸部から、曲接して上方に立ちあがる口縁部をもつ。この種の類例は、主として畿内・山陽地方で発達するものだが、近江においても顕著に認められる。口頸部の外面全面に櫛描文を施す。この種の壺で、本例のように繁縟に装飾する例は類例が少なく、そこに地域色が抽出される。なお、櫛描文は7cm前後の間隔で描き継ぎが認められる。口頸部の立ち上がりが低く、櫛描文を多様する点から畿内第Ⅲ様式新段階の年代が求められよう。

甕A類（図3－13・14）　従来、佐原真氏によって畿内型の甕として理解されたものと同一系譜のものである（註2）。口縁部をやや強く外反させ、外面の頸部以下にやや粗いタテハケを行なった後に櫛描直線文を施す。体部外面にみるタテハケは、口縁部に及ぶ場合が多い。内面の櫛描波状文を施文する前段階に、ヨコハケすることを原則とする。こうした櫛描文等の施文にはハケ原体を用いている。本例では認められないが、口縁部外端に押圧文を加えた可能性も考えられる。こうした文様手法の背景には、伊勢湾沿岸部の水神平系土器群特有の地方色と深く関わっており、そこに甕Aの性格の一端が窺えるのである。

甕B類（図3－15～19）　口縁部を上方へ拡張するいわゆる近江型とされる一群（註3）。口縁部外面をヨコハケで仕上げるもの（15～17）と、文様帯を有するもの（18・19）に分けられる。その内16・17は口頸部が発達した新しい要素を備えており、壺E類と伴出したことはこれを裏付けるものである。口縁内面に波状文を施したり、粗いハケを用いる点は甕A類に共通している。また、壺B類同様の波状口縁が目立つことも特徴的である。

4

土器については凹線文が殆ど目立たないことが注意を引いた。また櫛描文には描き継ぎが認められ、そこには回転台の存在は窺えなかった。壺B・C類では近江型甕と共通性が強く近江型壺としてとらえられよう。今後、こうした在地性の強い一群がさらにセットとしてとらえられることを期待したい（註4）。器種構成では、供膳形態が殆ど見当らず一般集落との違いが興味深い。

調査で、弥生中期の遺構を確認するに至らなかったが、石製武器の発達や立地条件等の諸点から本遺跡を弥生中期中葉を主体とする政治的緊張下に成立したムラとしてとらえたい。　（岩崎直也）

註(1)小林行雄・佐原真『紫雲出』　1964
(2)・(3)「琵琶湖地方」『弥生式土器集成』本編2　1968
(4)『弥生式土器集成』本編2のPL、50－4など

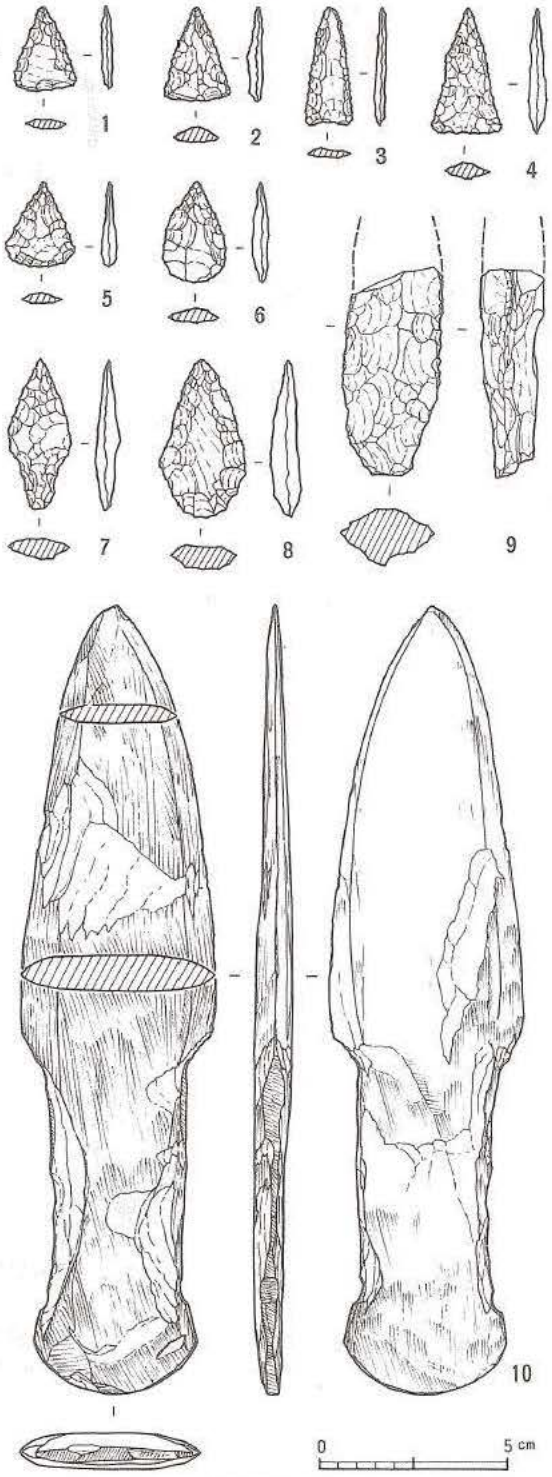


図2　堤ヶ谷遺跡出土　石器実測図

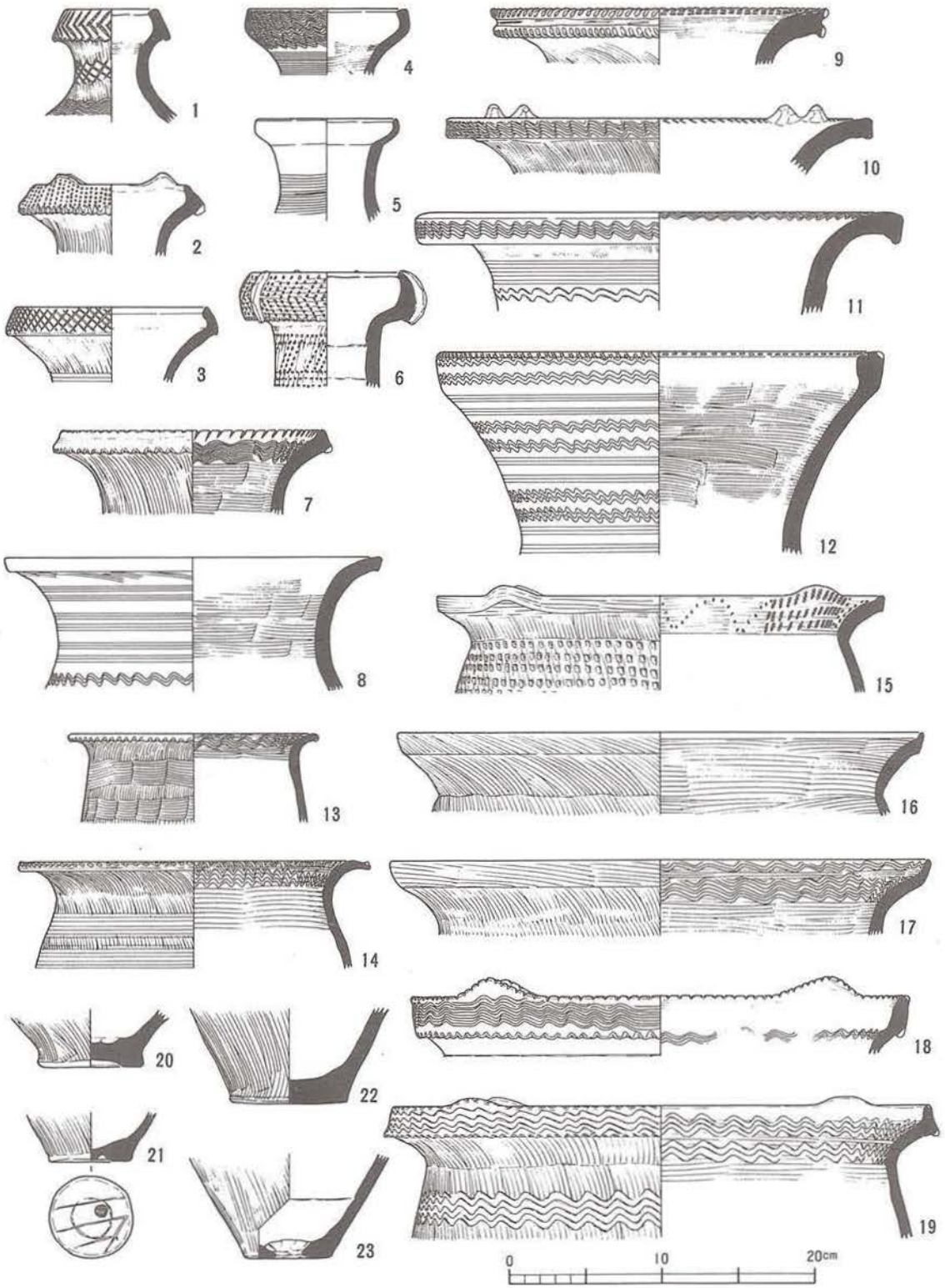


図3　堤ヶ谷遺跡出土　土器実測図